ARTA

AUTOBACS RACING TEAM AGURI

「灼熱に耐え、再び頂点へ」

2019 ARTA DIGITAL Rd.4 THAILAND
FIGHTING AGAINST BURNING HEAT

AUTOBACS RACING TEAM AGURI ARTA

今年のタイには雨が落ちてこない。激しいスコールの襲来がなく、厳しい暑さの下で決勝のスタートを迎えた。
GT500 クラスを戦う 8 号車 ARTA NSX-GT は伊沢拓也がステアリングを握って 8 番グリッドから上位を狙う。
予選ではトップまで僅差であったため、充分にチャンスはあった。
1 周目に 7 位に浮上した伊沢だったが、2 周目にスピンを喫してしまい最後尾に後退してしまった。それでも
まだ諦める必要はなさそうだとエンジニアの星学文が伝える。

AUTOBACS RACING TEAM AGURI ARTA

伊沢「ハァッ、ハァッ、ごめん、スピンした！」
星「了解、了解。ここから頑張ろう。タイヤは大丈夫？」
伊沢「はい、大丈夫です」

星「次の周から 300 が出て来ます。上手く処理してポジションを上げていこう。ペースは良いよ。今全体のベスト」
トップと同等以上のペースで追い上げる伊沢は、すぐに下位のマシンに追い付いて前を塞がれるようなかたちになった。
そこでエンジニアの星は早めのピットインを提案した。
純粋なペースが良いのなら、前を塞がれず自由に走れる状態にしておきたいからだ。

AUTOBACS RACING TEAM AGURI ARTA

星「トップとのギャップはずっと変わらず 20 秒」
伊沢「了解、了解」
星「あと 4 周でウインドウオープンです。前の 1 号車に引っかかっている感じがあるから、ミニマムで入れちゃおうかと思ってます」
伊沢「引っかかっているという感覚はなくて同じくらいのペースだけど、それでも良いよ」
星「了解、25 周目で入れます」

ARTA
HONDA
ARTA
8
CUSTOS
AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI
ARTA

一方、GT300 クラスを戦う 55 号車 ARTA NSX GT3 は高木真一がスタートドライバーを務める。
ランキング上位につける 55 号車には 57kg という厳しいハンディキャップウェイトが搭載され、なおかつ NSX GT3 にとって初めてのサーキットということでデータも無く厳しい戦いになるはずだったが、このチャーン・インターナショナル・サーキットが初体験の福住仁嶺が予選 5 位という好タイムを記録した。

AUTOBACS RACING TEAM AGURI ARTA

TOBACS
Nire
AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI
ARTA

しかし暑さのせいかブレーキのABSが不調となり、高木は2周目に止まりきれずコースオフして4つ順位を落としてしまった。
エグゼクティブアドバイザーの土屋圭市とレースエンジニアの一瀬俊浩が

高木「ちょっとツラいなぁ……」

土屋「真一、無理しなくて良いよ。周りがタレてくるまで待て」

高木「結構ブレーキが効かなくなってきたねぇ」

一瀬「了解。結構温度が高いので冷やしながら走ってください」

8 号車と同じくレース開始直後にポジションを落としてしまった 55 号車だったが、
こちらもペース自体は速く、まだまだ諦める必要はなかった。
一瀬「今上位勢のペースが落ちてきて高木さんと同じくらいです」
高木「はいよ〜、これから頑張りまぁす！」
土屋「頼むよ〜！」

高木はエアコンをオフにして少しでもエンジンパワーのロスを抑えて走るが、それでも前走車を追い抜くことは容易ではない。そこで浮上したのはタイヤを 2 輪交換にしてストップ時間を短くする戦略だった。
一瀬「今ポジション 12。もし 2 輪交換にすれば初音ミクの前くらいに出られるかもしれないんですけど、タイヤはどう？」
高木「今のところ大丈夫、安定してる。なるべくリアで走るようにしてる。その作戦でいくしかないでしょ」
一瀬「仁嶺、ヘルメット以外は用意しておいて。もうウインドウに入ってるから」
高木「もしオレのペースが遅いんだったら 4 輪交換だよ、これ。ちょっとだけいつものところがアンダー。ずっとオフだからね、エアコンは」
一瀬「了解。だとしたらちょっと厳しいかな。上位は 34 秒台で周回しているから」
しかし高木はそこからペースアップしてきた。
一瀬「この周ラップタイム良いよ。このタイムならフロント無交換にしたいな」

AUTOBACS RACING TEAM AGURI ARTA

そう言っていた矢先の 33 周目、GT500 クラスの数台が絡む事故が起きた。そこに巻き込まれていたのは、野尻智紀がドライブする 8 号車だった。

野尻「あぁ〜、壊れたぁ……」

星「何が壊れた !?」

野尻「ごめん、当たった。左リア。当てられた感じもあるけど……」

星「動けない？」

野尻「サスペンションが折れてる」

星「了解、了解」

野尻「前で 16 と 1 が当たって、1 が内側に入って来て、16 も内側に入って来たのを抜いて行こうとしていたら左リアが当たったっていう感じ」

これでセーフティカーが出る可能性を考慮した一瀬は、すかさず 55 号車をピットに呼び入れた。

AUTOBACS RACING TEAM AGURI ARTA

一瀬「8 コーナーイエロー。SC 出るかもしれないから入ろう！ リア 2 輪交換でいこう。フロントは要らない！」2 輪交換に合わせてドライバー交代の時間を短縮するため、チームはクールスーツに接続する氷の交換を行なわないことを決めた。交換しなければレースの最後まで氷が保たない可能性があり、福住はクールスーツを脱いでコクピットに向かう。ポジションを上げるための捨て身の戦略だった。

ARTA
HONDA
CVSTOS
BRIDGESTONE
Castrol EDGE
Coca-Cola
GOMTEC
PIT-PRO
AUTOBACS RACING TEAM AGURI
ARTA

一瀬「SC 入った」
福住「あと何周あるの？」
一瀬「あと 25〜26 周」
福住「了解、クールスーツ着いてないから！」
一瀬「頼むね！」
福住「フロント無交換だっけ？」
一瀬「そう、だからアウディの前に出られた。実質 8 位か 9 位かな。リアタイヤのマネージメントだけしっかりね」
福住「了解。大丈夫、全然大丈夫」

AUTOBACS RACING TEAM AGURI ARTA

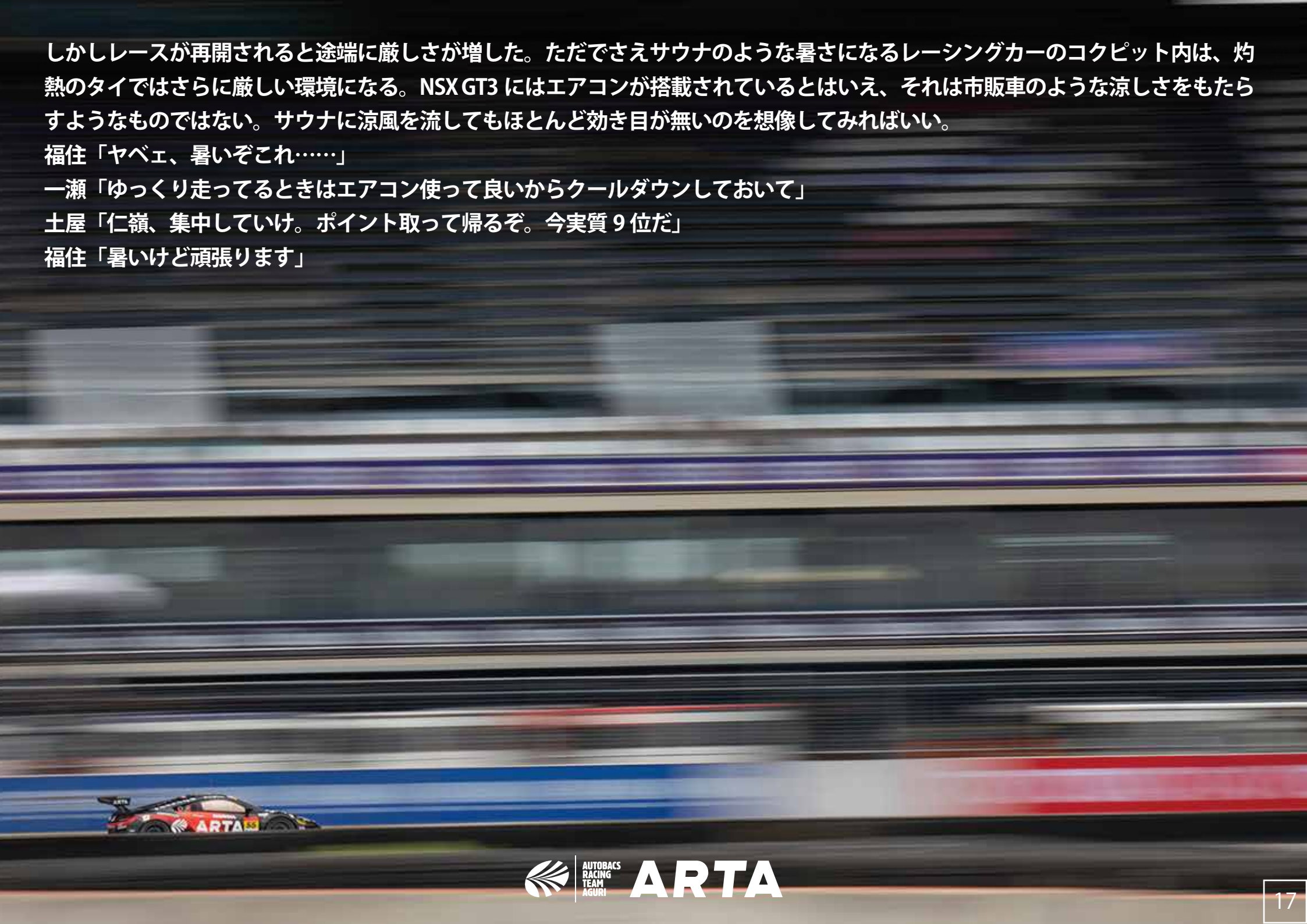
しかしレースが再開されると途端に厳しさが増した。ただでさえサウナのような暑さになるレーシングカーのコクピット内は、灼熱のタイではさらに厳しい環境になる。NSX GT3 にはエアコンが搭載されているとはいえ、それは市販車のような涼しさをもたらすようなものではない。サウナに涼風を流してもほとんど効き目が無いのを想像してみればいい。

福住「ヤベェ、暑いぞこれ……」

一瀬「ゆっくり走ってるときはエアコン使って良いからクールダウンしておいて」

土屋「仁嶺、集中していけ。ポイント取って帰るぞ。今実質 9 位だ」

福住「暑いけど頑張ります」



しかし周回が進むに連れて福住は意識がもうろうとするほどの状態になり、それでもなんとかポジションをキープして走りつづけていく。

福住「いやぁ、キツい。ホントにキツい……」

一瀬「後ろは紫の GT-R になった。気をつけろ」

福住「あと何周？」

一瀬「あと 13〜14 周。まだポイント圏内だ、頑張れ」

福住「今何位？」

一瀬「今ポジション 10」

福住「あぁ〜、ドリンクもない。ヤバい……」

AUTOBACS RACING TEAM AGURI ARTA

セーフティカー導入に合わせて緊急ピットインを行なったため、クールスーツについていたドリンクチューブも取り外され、それを着け直す時間がなかった。だから福住はクールスーツが無いどころかドリンクも飲むことができない状態での走行を強いられていたのだ。脱水症状寸前で意識が飛びそうになりながらも、福住は耐えに耐えて走りつづけた。

福住「あと何周？」
一瀬「あと９周、あと９周頑張れ」
福住「暑い……」
土屋「仁嶺、頑張れ。１ポイントだよ」
福住「なんか喋ってて！」
誰かが喋りかけていなければ意識を失いそうだと言わんばかりに、福住は無線で訴えかけた。
長い、長い９周を走り切り９位でチェッカードフラッグ。
これ以上無いほどに苦しい状況の中で、１ポイントを掴み獲った。

AUTOBACS RACING TEAM AGURI ARTA

一瀬「オーケー、グッジョブ！ ポジション９！」
土屋「よくやった、お疲れ！ ポイントゲットだ！」
福住「水、とにかく水ちょうだい。冷たいお風呂！」
一瀬「ゆっくり戻っておいで」
福住「ゆっくりじゃ嫌だ、早く帰る！」

8 号車は速さがありながら不運でチャンスを失ってしまったが、55 号車はポイントを掴み獲った。たかが 2 ポイントだろうと、されど 2 ポイント。チャンピオンシップを狙う ARTA にとってはどんなポイントさえ重要な一歩となる。そしてなにより、苦しく絶望的な中でも自ら活路を切り拓きポイントを勝ち獲ったというその事実が大きな意味を持っていた。

タイでこの上なく大きな収穫を得た ARTA は、再びランキング首位を取り戻してシーズン前半戦を終え折り返した。

AUTOBACS RACING TEAM AGURI ARTA

AUTOBACS RACING TEAM AGURI ARTA

AUTOBACS RACING TEAM AGURI ARTA

ARTA
CVSTOS
ARTA
AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI
ARTA

株式会社オートバックスセブン

ARTA

THE "BIG RACE" FOR SUZUKI AGURI STARTED IN 1998
AS HIS VISION FOR THE FUTURE. OVER THE YEARS, IT HAS EVOLVED
THROUGH THE TOUGHNESS AND WILL OF ARTA. IN THAT SPIRIT,
ARTA IS RACING TO INSPIRE THE FUTURE OF MOTORSPORTS.

ARTA Project

ARTA DIGITAL You tube チャンネル

To Be continued next race...

ZERO BORDER
Team ZEROBORDER

©2019 ZEROBORDER INC. All rights reserved. No reproduction or republication

Director and Photographer : Masakazu MIYATA
Text : Mineoki Yoneya
Design : Hiroaki KATAYAMA
Special Thanks : AUTOBACS SEVEN CO., LTD